

審査結果の要旨

(1) 研究の目的に意義や独創性があるか。

本研究の目的は問題基盤型学習 (PBL) の構造とメカニズムを解明することである。それは極めて今日的なテーマであり、以下の背景と理由から研究の意義は高いといえる。

21 世紀の国際社会は確たる知識と柔軟で多様なスキルを持った人材を求めている。予め唯一の正解が用意された問題を素早く解くのではなく、複雑に絡み合った問題群の中から最良と思われる解決策を考え出す能力が求められている。世界中の大学が有能な人材を輩出すべく激しい競争に晒されているが、我が国の文部科学省も「教員と学生とが意思疎通を図りつつ、学生が相互に刺激を与えながら知的に成長する課題解決型の能動的学修を中心とした教育への転換を促進」するよう訴えている。

PBL 研究の多くは学習者の学びの認知的及び対人的な側面を扱っており、内省的・情動的な側面はわずかに質的な研究があるだけで量的なものは皆無である。本論文は先行研究を丁寧に精査することによってこれまで明らかにされてこなかった、非英語圏における医学以外の分野の PBL 学習者の内省的・情動的な側面を事例研究を通じて取り上げるとともに、既存の理論を手がかりとしつつそれをさらに発展させ、PBL の包括的概念モデルを仮説的に構築・提示した。本研究が明らかにした、PBL によって生成される学びの多層的な構造と動的メカニズムは深い洞察と独創性に富んだものであり、今後の PBL の実践と研究に資するものである。

(2) 研究の方法は当該学問分野において妥当なものか。

著者は第 2 章で客観的基準に沿って 99 本の査読論文と 6 冊の書籍を厳選した。その後オープン・コーディング (記述された事柄・概念の抽象度を高めていく作業) を経て、先行研究を 6 つの大きなテーマに分類し、各テーマについて批判的に論考した。その上で既存の研究の欠落点を指摘し、今後の 6 つの研究課題を明示するとともに、その中で本研究が取り上げる課題を 4 つ選定したことを明示した。このように先行研究のレビューを極めて丹念に行ったことは特筆に値する。第 3 章では質的な事例分析手法を用い、PBL によってどのように学びが生成され、その学びが学生にとってどのような意味を持つのかについて厚く記述し掘り下げた考察を行った。さらに第 4 章では統計手法を用いて量的事例研究を行い、第 3 章における研究結果を補完・補強した。第 5 章は総合考察に充て、PBL によって生成される学びのフレームワークを検討するための理論的分析を行い、最終的に PBL の包括的概念モデルを仮説的に構築・提示した。

このように本研究は当該学問分野の特性を踏まえたうえで、各章の目的・内容に応じて妥当な研究方法を採択していると評価できる。

(3) 研究資料やデータの収集と分析が適切になされているか。

先行研究のレビューにあたっては、論文検索エンジン EBSCOhost を活用し、英語論文を中心として 1980 年代から今日までの膨大な数の文献が収集されている。その中の主要論文はすべて精査されており、PBL 研究の世界的動向が綿密に把握されている。

質的事例研究は、一つは都内 D 大学における 3 年間にわたる PBL 実践、もう一つは都内 G 大学における 5 年間にわたる PBL 実践をベースとし、学生が提出した自由記述式の回答用紙を質的分析手法の手順に則って客観的に分析を行っている。量的事例研究では、関東の S 大学での 1 回（異なる 2 クラス）の PBL 実践を基に、授業の前後で学生が提出したアンケート用紙について、データの内容に応じた適切な統計分析（t 検定、因子分析、分散分析）が行われている。総合考察ではそれまでに得られた知見をもとに堅実かつ発展的な理論的分析が行われている。

以上から、研究資料やデータの収集と分析は適切になされていると判断できる。

（4）研究の考察と結論が妥当であり、学術的な水準に達しているか。

本研究では第 3 章及び第 4 章において 3 つの事例研究がなされているが、それぞれにおいて結果に基づいて考察が行われ、妥当な結論が導き出されている。第 5 章では総合考察がなされており、前章までに得られた知見を整理した後、既存の理論を手がかりとしつつ、それを批判的に検証し発展させ、PBL の包括的な概念モデルを仮説的に構築している。同モデルは今後さらなる検証が必要であると著者自身が述べているものの、深い洞察に満ちたものであり、新たに得られた知見を踏まえた結論も妥当なものである。

本論文には「論文目録」にあるような査読付きの国際学術誌に掲載された論文や学会発表が含まれており、十分に学術的な水準に達しているといえる。

（5）取得学位にふさわしい意義や成果が認められるか。

冒頭に述べたとおり本研究が取り上げた問題基盤型学習（PBL）のより一層の実践と研究は、21 世紀の国際社会の要請でもある。本研究は、当該分野の先行研究でほとんど焦点の当てられてこなかった、PBL 学習者の内省的・情動的な側面を取り上げ、事例研究及び理論研究を通じて包括的な概念モデルを提示したものである。その内容もさることながら、本論文が英語で執筆されたことは誠に意義深く、それにより日本のみならず世界中の読者の目に留まることが期待される。その意味するところは地球規模の実用に供することであり、学術的にも実務的にも大きなインパクトが期待されるものである。

以上の点を総合的に考慮し、審査委員会は全員一致して、本研究が東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科の博士（教育学）の学位を授与するにふさわしい水準にあるもの判定した。